

平成26年度水稻生育診断予測事業速報No. 1

(早植栽培 5月26日調査結果)

平成26年5月29日

栃木県農政部経営技術課



平年より莖数が多い。充実した莖を確保するため、早め（6月第1半旬）に間断かん水に入る。



県中南部では、イネ縞葉枯病の発生量が多いと予想されているので、防除を徹底する。

1 気象概況《4月上旬～5月第5半旬（宇都宮）》

4月上旬の平均気温は平年より0.6℃高かったが、中旬は0.4℃低くなった。下旬以降は平年よりも高く経過し、特に5月中旬は2.2℃高くなった。日照時間は、4月上旬から5月中旬まで平年比107～160%と長く経過し、第5半旬のみ90.1%と平年より短くなった。4月の降水量は平年並の112%、4月下旬の県内ダム貯水量も平年並～多く確保されていたことなどから、移植は平年並に進んだが、5月に入ってから降水量は平年よりも少なく経過した（平年比：5月上旬40%、中旬8%）。

2 調査結果《早植栽培、品種：コシヒカリ》

(1) 16か所平均（表1-1～2）

ア 苗調査

苗草丈は平年比93%と短かったが、乾物重はやや重く（平年比102%）、葉齢は平年より0.2葉多く、苗の生育はやや進んでいた。

イ 本田における生育調査

草丈はやや長く（平年比102%）、莖数は多く（112%）、葉齢は0.3葉多く、葉色は平年並（+0.1）。生育診断値（葉色×莖数）は平年比113%と大きい。

(2) 分施肥体系の生育（10か所）（表1-1～2、2-1～2）

ア 草丈は25.2cmで平年比102%とやや長く、莖数は165本/m²で平年比107%と多い。

イ 葉齢は5.6葉で平年より0.3葉多く、葉色は4.4で平年並。

ウ 葉色×莖数値は730で平年比106%と大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は5か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが57.5%（平年51.4%）、主茎第3節分けつは55.0%（平年21.2%）で、どちらも平年より大きい。また、葉面積は0.13m²/m²で平年比125%と大きく、乾物重も9.8g/m²で平年比120%と重い。【農試調査】

(3) 全量基肥体系の生育（6か所）（表1-1~2、2-1~2）

ア 草丈は27.4cmで平年比103%と長く、茎数は140本/m²で平年比123%と多い。

イ 葉齢は5.5で平年並より0.3葉多く、葉色は4.2で平年より0.2濃い。

ウ 葉色×茎数値は591で平年比128%と大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は5か所で確認され、防除を実施していない塩谷町と芳賀町で発生程度はやや高い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが60.0%で（平年33.4%）、主茎第3節分けつは37.5%（平年16.1%）で、どちらも平年より大きい。また、葉面積は0.09m²/m²で平年比113%と大きく、乾物重も8.4g/m²で平年比121%と重い。【農試調査】

3 技術対策

育苗初期（4月中旬）の気温が平年よりも低かったことが影響し、苗丈は全般に短くなったが、育苗期間中の気温は平年よりも高く、日照時間も長く経過したことから、やや生育が進んだ充実した苗となった。

移植後、特に5月中旬の気温は県全域で2℃程度高くなり、日照時間も平年比150%前後と長くなった。これにより、水温・地温が上昇して順調に活着し、分けつの発生が促進され、平年より下位分けつの発生率は大きくなった。調査日が基準日より1日遅いことを考慮しても、分肥、全量基肥ともに茎数が平年より多く確保できている。また、葉齢から判断すると、生育は平年より1~2日程度進んでいると推定される。

気象庁地球環境・海洋部発表（26年5月22日）の「関東甲信地方 1か月予報」（5月24日~6月23日の天候見通し）では“気温は平年並~高く、降水量は平年並~少なく、日照時間は多い”と好天が予想されている。今後、葉色×茎数値を適正範囲に維持するためには、やや生育を抑えることが必要と考えられることから、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

目標とする茎数（穂数）360~380本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数30千~32千粒/10a）を確保するまでは、夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温の上昇を図り、分けつ発生を促進する。

目標茎数が確保でき次第、間断かん水に入る。平年の間断かん水開始時期は6月第2半旬であるが、今年は葉齢展開がやや早く、分けつの発生が順調なことから、平年よりも開始時期を早め、6月第1半旬には間断かん水に入る。なお、茎数が平年より少ないほ場では夜間かん水、日中止水（浅水）を継続して分けつを促進するが、必要茎数が確保でき次第間断かん水に入る。

白未熟粒の発生を防止するとともに、登熟度を高めて良質米を生産するためには、

適正籾数を確保することが重要である。初期の莖数が多く、過繁茂気味の生育になると籾数過剰となり、食味、品質の低下を招く恐れがある。適正籾数確保には間断かん水に入る時期が重要となるので、遅れないようにする。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センター発表（26年5月29日）の「平成26年度 病害虫発生予察注意報 第1号」（別添）では、県中南部でイネ縞葉枯病の発生量が多いと予想されている。

当該地域では、ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用して、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用＋本田での薬剤散布）を実施する。

イ イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ

イネミズゾウムシの発生が目立つほ場（移植後2週間の水田における成虫密度が株当たり0.5頭以上が要防除水準）では、有効な薬剤により防除を行う。

多雨で湿度の高い日が続くとイネドロオイムシの幼虫発生期間が長引き、多発生になりやすいことから、今後の天候と発生状況に十分注意する。

ウ いもち病（葉いもち）

取り置き苗はいもち病の発生源となるため、早めに処分する。

(3) 雑草防除

中期除草剤の散布は、使用時期に注意して散布する（移植後30日までのものが多いので、ラベルを十分確認）。なお、MCPB等を含む除草剤は低温、シメトリンを含む除草剤は高温で薬害が生じ易いので注意する。

除草剤散布時の水管理は、散布直前に水深4～5cmとし、散布後7日間は落水・かけ流しをしないよう注意する。

※ 農薬はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)

(4) 天候不順への備え

気象庁地球環境・海洋部発表（26年5月12日）の「エルニーニョ監視速報（No. 260）」では“今年の夏には5年ぶりにエルニーニョ現象が発生し、秋にかけて続く可能性が高い”と予想されている。エルニーニョ現象が発生すると、西太平洋熱帯域の海面水温が低下、積乱雲の活動が不活発となり、日本付近では、夏季は太平洋高気圧の張り出しが弱くなり、低温、多雨、寡照となる傾向がある（近年では、平成9年、14年、21年に発生）。

天候不順に対応できるよう、以下の点に留意しながら準備を進めておく。

ア 深水管理が可能な畦畔

稲が低温に弱い時期は、幼穂形成期（出穂前25日頃、早植コシヒカリで7月上旬）～減数分裂期（出穂前14～7日頃、早植コシヒカリで7月中～下旬）である。特に、減数分裂期に最低気温が17℃を下回ると不稔が発生し、減収の危険性が高まる。さらに、幼穂形成期、減数分裂期の両時期に低温に遭遇すると被害が助長される。

このような場合は、幼穂形成期から減数分裂期にかけて深水管理を行い、水の保温効果により幼穂を低温から保護することが基本技術である。そのためには、畦畔を深水管理が可能な状態にしておく必要がある。

イ いもち病の防除

天候不順時は、稲の軟弱生育といもち病の発病好適条件が重なり、発生が拡大して減収の危険性が高まる。

間断かん水により稲体の窒素濃度を下げて稲体を硬くし、いもち病に対する抵抗性を高めるとともに、初発時期（6月第4半旬～第6半旬）にはほ場をよく見回り、早期発見・早期防除に努める。

ウ 加里の追肥

加里は、デンプンの生成、同化産物の移行、根の活性化に重要な働きをする。

天候不順時は稲体の窒素濃度が高くなりやすく、拮抗作用で加里の吸収は抑制されるため、追肥により積極的に加里濃度を高める必要がある。特に、分けつ盛期以降では、加里濃度が低くなるので、出穂前40～45日頃に積極的に加里を追肥する。



4月～6月は「春の栃木県農作業安全確認運動」の実施期間です。
高齢者の事故が多発しています！余裕を持った作業を心がけましょう。



6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。
いつものチェック！農薬の使用状況を正確に記帳しましょう！